01 町づくりの中心に「縁側」を

横瀬町まち経営課 主幹
田端 将伸

埼玉県秩父地方の東端に位置する秩父郡横瀬町は、山々に囲まれた盆地にある。農協の直売所跡地を転用したフリースペース「Area 898（エリア898）」に彼はいた。町職員の田端将伸さん（48）。地域商社「ENgaWA（エンガワ）」を仕掛け、企業に実証実験の場を提供する「よこらぼ」を担当する。「エリア898」に来た町民と頻繁に挨拶を交わす。顔見知りのようだ。月曜の昼下がりだというのに、老いも若きも町民も都会の人も同じ空間に集い、くつろいでいる。ここには「縁側タイム」がゆったりと流れている。

（39ページに「教えたくなる田舎時間」）

profile

たばた・まさのぶ／1974年横瀬町生まれ。生まれ育った同町役場に高校卒業後、18歳で入庁。税務、財務、観光担当を経て、民間企業、団体、学校等との新しい関係性を築くための仕組み、官民連携プラットフォーム「よこらぼ」の担当として現在に至る。地域商社「ENgaWA」を立ち上げ、地域に新たな経済循環をつくる活動も始めた。地元の劇団「天末線」で役者をしているほか、消防団など地域の活動にも力を注ぐ。

#1 地域の象徴、武甲山

町のシンボルは石灰岩の白い山肌が特徴的な武甲山。人口約7800人の小さな町は、急激な少子高齢化により過疎化が進むが、民間調査の「住み続けたい街」ランキングで、埼玉県内の自治体の中で上位に入るなど注目を集める。町づくりのメッセージはこの人を介して「ジモノ」（地元の者）にも「ソトモノ」（地域外の者）にも伝わっていく。田端さんは町の「電波塔」のような人だ。

――名刺の「失敗推進係長」という「役職」が気になりました。

自分が今、必要なこと、やりたいことを勝手に肩書にしようと決めているんです。名刺は500枚単位で作っていて肩書はその都度変えています。その前は「チャレンジ係長」でした。「チャレンジしろなんてオッサンぽくて嫌だよね」と若者に言われ、同じような意味でも失敗を許容するというぐらいの方がいいなと思って変えました。

――横瀬町は人口約7800人の山あいの町です。「チャレンジする町」を掲げ、総務省の2022年度「ふるさとづくり大賞」で優秀賞を受賞されました。

町の最大の課題は、やはり人口減少です。と言いながらも、人口を増やせばいいだけの施策は行いません。これから人は増えていかないという想定で町づくりをしています。例えば、この「エリア898」もそうなんですが、元々JAちちぶ横瀬支店の直売所をリノベーションして、まちづくりの拠点をつくったんです。きれいで立派な建物をつくれば人が集まってくるという時代ではもうないですよね。一番大事なのは、人口減少に向かっていく中で、お金ではない新しい価値を見つけたい。それは何なんだろうといったときに、「頑張る人を応援する町」が横瀬町らしさなんじゃないかと。あっ、携帯が鳴ってしまいすみません。

「エリア898」の後ろにある施設をご覧になりました？「NAZELAB（ナゼラボ）」といって22年7月に日本財団の助成を受けスタートした事業です。一般社団法人「タテノイト」が運営し、子どもたちに学校でも家でもない第三の居場所を提供しています。学校になじめない子どもたちが全国で増えていることに、ものすごく危機感を持っています。だからこそ、学校に通うことがダメなら「ナゼラボ」という選択肢が必要なんです。さらに今「エリア898」の2階に、子どもが中心のテレワーク拠点をつくり4月から運用が始まりましたが、元々JAの倉庫だった場所で空いていました。

――「保育・託児施設」ではなく「ワークスペース」なのですね。

子育ての仕方に選択肢をつくり、誰もが過ごしやすい場所にしたいと思っています。親子で利用してもらい、自宅と環境が違うスペースで、子どもはクッションマットの上で遊び、その間の少しの時間でもテレワークをしたり、社会に開かれた場所で別の親子と触れ合い、悩みを共有したり。交流スペース「エリア898」とも連携して、子どもたちが地域にどんどん加わっていけるような場所をつくりたいですね。子育て支援の部署が行ったアンケートの中で未就学児を遊ばせる場所がほしいという声がありました。いろいろ選べるということがとても大事だと思っていて、いずれにしても家の中に閉じこもらないで、幼少期から社会に触れてもらいたいと思います。

「ナゼラボ」に来る子どもは面白いですよ。ここ（エリア898）にも「遊ぼうよ」と入ってきますし、「おじさんは仕事中なんだよ」みたいな会話が生まれたり、悪いことをすれば怒られたりもします。親や先生だけでなく、社会の大人とふれ合うきっかけになります。

――官民連携のプラットフォームである「よこらぼ」が生まれるきっかけは何だったのでしょうか？

横瀬町だけでなく、秩父地域のまちづくりツアー「ソトモノツアーズ」のメンバーと富田（能成）町長との会話がきっかけで生まれました。スタートアップ企業が実証の場がなくて困っているとのことで、横瀬町でできないかという提案があったのです。何しろ、企業誘致は全国どの自治体でもやっています。「固定資産税を減免するから来てください」「うちは補助金を手厚くします」と誘致合戦が繰り広げられています。でも、お金がない小さな自治体は何もできません。しかも中山間地域の広い土地もないところではなおさらです。ならば、新しいプロジェクトや事業を呼び込み「関係人口」を生み出しながら、スタートアップの取り組みが世の中に広まっていったら面白いですよね。町長の直観で「それをやろう」と言って始まったのが「よこらぼ」です。

プロジェクトは16年10月からスタートしたのですが、私も観光担当からまち経営課に異動し、構想から1年もかけずに提案を10件受け入れ2件を採択すると聞き、初めは半信半疑でした。「こんな知名度のない町に企業案件を10件呼ぶなんてどれだけ自分が営業しないといけないんだろう」と思っていました。同年9月30日にメディアを呼んで「よこらぼ」のお披露目会をしました。実はこの時、国からの地方創生加速化交付金をPR費用に活用しようと取っておいたんですが、お披露目会で人口約7800人の小さな町が発信した「どんな提案でも受け入れます」「あなたのチャレンジを応援します」というキーワードが一人歩きして、全国紙、テレビ、ウェブメディアでも取り上げてもらったおかげで交付金を1円も使わずPRもできました。3カ月で10件を受け入れ採択が6件と、あっと言う間の目標達成でした。

実現に半信半疑だった私の方が、スタートアップ企業について不勉強だったわけです。彼らは実証の場を必死に探していたのです。そこにマッチしました。23年1月までの6年間で、提案206件、採択は126件に上ります。面白いのは、始めたときは東京のスタートアップ企業、中でもシェアリングエコノミー業態が多かったんですが、それが一旦落ち着くと大企業の新規ビジネス部門が増えてきて、今度は中小企業や大学との連携も出てきました。そして、うれしいことに今では町民も興味を持ってくれるようになりました。どぶろく特区もその一つで、町民が遊休農地を利用して栽培した横瀬産米で造ったどぶろくは町の特産品につながりました。

「よこらぼ」は、外部から「人」「物」「金」「情報」を継続的に流入